

伊藤家 明治の絵葉書展

6代伊藤文吉時代の実逡便



引首 (五其) べらく腕の供子



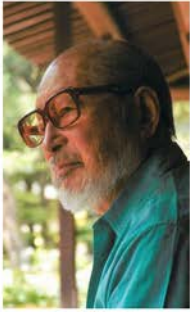
北方文化博物館

NORTHERN CULTURE MUSEUM

にいがた

地域映像アライヴ

ご挨拶



私は官公庁より委嘱を受ける仕事の無い人間であります、平成に入って信越郵政局よりの依頼で「お礼は手紙運動」の委員として年二度長野市へ行きました。この委員を引き受けた大きな理由は、日本各地で年数回発行される記念切手の8割が80円切手で50円切手はわずかの2割。子供達が修学旅行に行き両親や友達に送る便りは全て「絵はがき」なのになぜ50円切手が少ないのか、それを公的な会議で主張したかったからです。

私が父の後を継ぎ当博物館に戻って来たのが1958年、三年程県内の博物館を見て歩き、三年後アメリカでICOM（国際博物館会議）出席の為に渡航したのが私の旅の大学の始まりでした。写真や少々のメモだけでは帰国してから生々しい現地での記録はまとめられず、二度目の渡航から母から友人に至る人達にその理由を説明し、旅先から出す絵葉書に小さく数字をいれ帰国してのち、それらを回収して数字の順にまとめるとちょっとした旅日記が出来る事に気づいたのです。絵葉書のちょっとした活用法です。そんな事で葉書を書く事が楽しくなり、外国へ行くとまず求めるのは葉書用の切手を50枚分、生きた感情を伝えるのは長文の手紙より簡単に求められる絵葉書が一番です。特に私のように文才の無い人間には、今でも一週間に最低10枚から20枚、記念切手が発行されると必ず4シートは求めています。最近上京すると大きな文房具店へ行き色々な色のインクを求め四季折々の便りも色分けして書いています。

この度、「伊藤家明治の絵葉書展」が企画され私も初めて見るものも多く、なつかしく見ている内に明治、大正期に生きた人達が如何に自分の気持ちを表現したかが、なつかしく又、驚きをもって過ぎ去った日本人の生活の生きざまを羨望の心で眺めております。文明が高度に発達した今日の情報の伝達方法の味気なさ、味気の無い日本語。この度の絵葉書展を見て美しかった日本人の通信と伝達技術を見なおしたいと思います。

北方文化博物館館長 伊藤文吉

「軌跡」によせて



ここに、『にいがた 地域映像アーカイブ』のNo.2を、お届けすることになりました。No.1を賑々しく発刊してから、2年半ほどたってしまいました、この間、たくさんの方から、ご心配と激励をいただきました。あらためて御礼を申し上げます。

地域に埋もれている身近な文化遺産の再発見と再評価を掲げた私たちの取り組みは、地域の方から暖かく迎えられる、おかげさまで多くの成果をあげることができました。

今回の刊行は、財団法人北方文化博物館のご協力を得て、この11月に開催されるはこびになった「軌跡—伊藤家明治の絵葉書展—」にあわせて企画されました。これは、北方文化博物館で発見された、6代伊藤文吉氏の夫人であった真砂さんが保管されていた一大絵葉書群の一部であります。ギャラリーに出展されるのは、その一部ですが、真砂さんとその周辺の人びとの交流や、明治時代の郵便事情や絵葉書文化が浮かび上がってきます。

No.1でも申しましたが、私たちの教育・研究の営みは、地域の皆さんのご支援なくしては成し遂げることができません。またその成果を皆さんに披露して、ご感想やご意見をいただくことも重要なことだと思っております。このような考えから、私たちは、2009年度から、「社会をひらく「きづく力」と「つなぐ力」—社会に見える実践的人文知の涵養と発信—」という教育改革プログラムを、文部科学省の採択を受けて進めております。今回の企画は、その事業の一環であり、人文学部の教員と学生諸君の協働の成果でもあります。どうか忌憚のないご感想やご意見を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

新潟大学人文学部長 關尾史郎

明治の実逡便 絵葉書



NC-C-114-1-003a 渋柿 PERSIMMONS



NC-C-114-1-003b

渋柿 PERSIMMONS



NC-C-114-2-021b

風車小屋



NC-C-114-2-021a

風車小屋



NC-C-007-1-192a

亀井戸天神社の藤棚



NC-C-007-1-192b

亀井戸天神社の藤棚



NC-C-001-1-029b
B.B. LONDON. SERIES No. H.6.



NC-C-001-1-029a
B.B. LONDON. SERIES No. H.6.



NC-C-007-1-201b エンボスが施された絵はがき



NC-C-001-1-047a 年賀状(ゆきだるま)



NC-C-001-1-047b 年賀状(ゆきだるま)



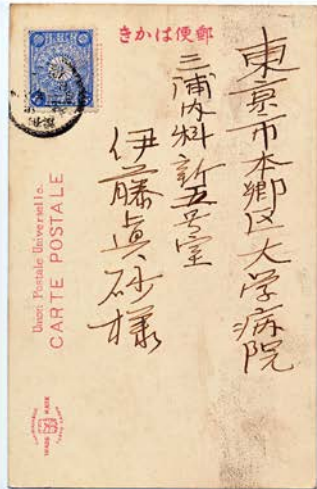
NC-C-007-1-201a エンボスが施された絵はがき



NC-C-114-1-099b ハイカラ男性図



NC-C-114-1-099a ハイカラ男性図



NC-C-114-2-014a 新年の富士山



NC-C-114-2-014b 新年の富士山



NC-C-001-1-085b



大本營 NC-C-001-1-085a 大本營



NC-C-114-1-005a 手紙扇



NC-C-114-1-005b 手紙扇



六代文吉と真砂夫人時代の伊藤家 「絵葉書展」の資料から見えてくる実相

財団法人北方文化博物館統括室長・学芸員 佐藤隆男



新潟県の大平野をよぎる二本の大河がある。信州信濃川から流れ込んで

いる日本一の長さを誇る信濃川、會津盆地から流れてくる阿賀野川。この阿賀野川西岸に「沢海」と呼ばれる三百戸余りの集落がある。この地に江戸時代中期から根を下ろし、明治、大正、昭和にかけて代を重ねて、やがて豪商から豪農への道を歩み大地主となった一族、伊藤家の本邸がある。この地方一帯は、阿賀野川はじめ大小河川の氾濫原であったが、伊藤家はこれら土地の形勢が不利な地域の大規模な開拓を行い悪田を美田に変え次第に広大な新田を集積していった。地主としての発生は明治に入ってからであるが、やがて所在一市四郡六十四ヶ町村に跨り、所有田畑1,372ha、山林1,000ha、差配人78名、蔵所58ヶ所、小作人2,800余名を数え、作徳米三万俵、昭和期には県下一の地主となった。

1882(明治15)年から8年がかりで建てられたこの本邸は敷地8,800坪(30,000㎡)、建坪1,200坪(4,000㎡)、部屋数65を数える純日本式の豪壮さを備えた邸宅である。長年の風雪に耐え、往時の姿そのままに豪農伊藤家の暮らしを今に伝えている。

当時の田畑は農地解放によって伊藤家の所有から離れたが、かつての栄華を語るその遺構は北方文化博物館として財団によって管理されている。2000(平成12)年4月、国の登録有形文化財に登録された。



六代 文吉

2009年、端から端まで100mはあろうと思われる奥土蔵の2階戸棚から十数冊の古いアルバム帳が出てきた。重厚で明治の香りを発散し、暗がりの中で輝いていた。当時から理事の許可がなければ入れない宝蔵といわれてきたその蔵で、美術品の陰に隠れていた本家の宝物を見つけた。



真砂

発見された数々の絵葉書は1800点にのぼるが、探せばまだ出てくると含蓄するところ大である。ジャンルは多岐にわたり、達者な運筆で認められた絵葉書群の美しさに蔵の中で釘付けにされ、しばし明治、大正、昭和の移り変

わるその時代に生きた伊藤家のひとびとの中に溶け込みタイムスリップしたようであった。

六代文吉夫人^{まさご}が未亡人となった、1903(明治36)年は、絵葉書文化の黎明を告げ絵葉書メディアが世俗に浸透していく時代であった。それまでの書簡は、和紙の封筒手紙のやり取りによるものが多く残されている。例えばここに、2011年初めて存在が明らかにされた真砂直筆の書簡がある。義妹イツの嫁ぎ先、分田村(現阿賀野市)大岡家に送った巻紙の礼状である。達筆に書かれた文面は後述する六代文吉との新婚旅行の際、道中の安全を願い守り刀を大岡氏から預かり、そのおかげで京都、広島、東京への七十余日間に亘る旅は、「鼻紙一枚たりとも使用せず、無事帰郷できた」旨の手紙がある。守り刀のおかげで風邪も引かず、無病息災で帰郷できたという内容の礼状である。送先は、大岡治平宛、差出人は伊藤文吉となっているが、真砂が書いたものである。また、その太刀は、大岡家の家宝として代々引き継がれている。



大岡家の小白鞘(守り刀)



大岡治平宛宛の礼状



新潟新聞六代署名広告

女性はカタカナの名前が多かった明治の時代に、漢字名を授かった名門村山家から輿入れした真砂は、旧家の為乗りである「足入れ(婚姻の成立祝いをすませずに嫁が婚家に入ること・広辞苑)」を経験する。入嫁は1892(明治25)年5月23日、晴れて入籍となったのは、その年の9月3日、3ヶ月余の足入れ期間があった。伊藤家に入嫁したものの、その期間中の手紙の差出人名は伊藤真砂ではなく村山真砂となっている。

伊藤家では1882(明治15)年から着工していた大邸宅の築造が竣工した。その翌年の1890(明治23)年春、五代文吉は、六代となる謙次郎の嫁探しを開始していたのだ。伊藤家にふさわしい家柄の娘を探索した内密の書面によると、なんと新潟県下全域にわたる名家、財閥から五十六家の住所氏名と注釈付の一覧表が作成されていた。

築造したばかりの大邸宅が直ぐ縁終焉の地となることを誰が予想したであろう。五代文吉は、年も押し迫る1891(明治24)年の暮、跡継ぎの嫁の決定をみずに、四十八歳にしてこの世を去った。残された妻キイ四十三歳、倅謙次郎は二十一歳。葬儀後の1892(明治25)年1月8

日に家督相続し、翌9日は、謙次郎改め、六代文吉への改名許可届出書を提出している。また、1月22日付の新潟新聞（新潟日報の前身）には改名広告も出している。

明治25年の晩春、未亡人となったキイの主導で、この嫁探し五十六家一覧表にはなかった高柳村岡野町（現柏崎市）の庄屋、十代村山吉次の次女真砂（十六歳）が選り定められたのである。伊藤家からすれば家柄が格段に高い村山家とつながりを持つことで、財力に見合う家柄の向上を図ったのである。

村山家は信州の出で、東頸城郡松之山を経て寛永年間に高柳の地に移住し、それからは歴代に亘り岡野町の大庄屋を努めた名門。代々文人墨客が多く、八代正茂の弟は北越雪譜で知られる鈴木牧之の娘婿であり、九代鉄斎は山水画を能くし、分家の村山致道は画家である。累代続く文人家系で生まれ深窓に育った真砂は、長岡での嫁入り修行により博学多識な才女に転じていったのである。

五代文吉の次女ラクは、新潟の豪商、四代齋藤喜十郎へ嫁いだ。子宝に恵まれず弟の庫四郎が次代を継ぎ、七女八代重が嫁している。真砂と絵葉書のやり取りが多い末っ子八代重とは、年齢差もあり、文面からすると真砂はとりわけ可愛がっていたようである。また、八代重は後にでくる六代文吉の書斎兼茶室「三角間（後の三楽亭）」を一時期寓居としていた。ここは、八代重が生まれた部屋「新奥」から廊下で直結し、かつての謙次郎の勉強部屋でもあった。この新奥と呼ばれる部屋で、謙次郎は悶々と三角間の図面を作成した。この三角間は、11坪余の書斎兼茶室で、水屋もあり柱、建具、畳のほとんどが三角形や菱形で、正規の畳1枚だけが中心に据えられた世にも稀なる小亭である。昭和に入りこの三角間を七代文吉が三楽亭と命名した。

謙次郎はこの部屋を「元浩房」と名付け、自らを「元浩房主」または、「元浩園」、「南洋子」と称した。この「元」を紋様化し、定紋にかえて用いる裏家紋とした。やがて、この「元」を丸で囲んだ家紋印入りの印半纏を着た男衆が、1892（明治25）年5月に六代文吉と



6代一周忌。中央は次男淳夫（7代）
両脇はキイ（左）と真砂

なって間もない謙次郎の婚儀で、花嫁真砂を迎える儀式的警護や宮籍方の祝儀服となっていたのである。元は元首の元、伊藤家の長となった重圧を自ら嗜み、自覚しこの元という文字に拘泥していった。常時着用していた鍵札、ふみ箱、酒杓、酒瓶の箱などには丸元の焼印が押されている。また、六代愛用の印箱が二箱残されている。この中には、三楽山主、元浩房等々と刻まれた竹、石、鉄、象牙等の数十種類の印判が収納されている。

さて、新郎文吉22歳、新婦真砂16歳の婚儀は三日間続き、披露宴の第一日目は、両家親族50人、二日目は、番頭、米の仲買人、土地の支配人等約100人、三日目は、村の主立ち、集落の小作人、使用人等、100人で三日三晩盛大な祝宴が続けられた。

1894（明治27）年3月29日、長男文之助が生まれ、落ち着いたころ翌年の3月に世話係の男女二人をお供に、人力車四台で新婚旅行に旅立つ。京都を拠点に奈良、伊勢と参拝や見物にまわり広島へも足を延ばしている。帰路は東海道経由で東京に出て会津廻りで5月に帰り着いた旅は七十日間にも及んだ。この年の10月、不運にも文之助は1歳8ヶ月で夭折する。六代の「元浩房揚右卿」という記録覚書帳には、十月廿八日午前零時式十分病死と書

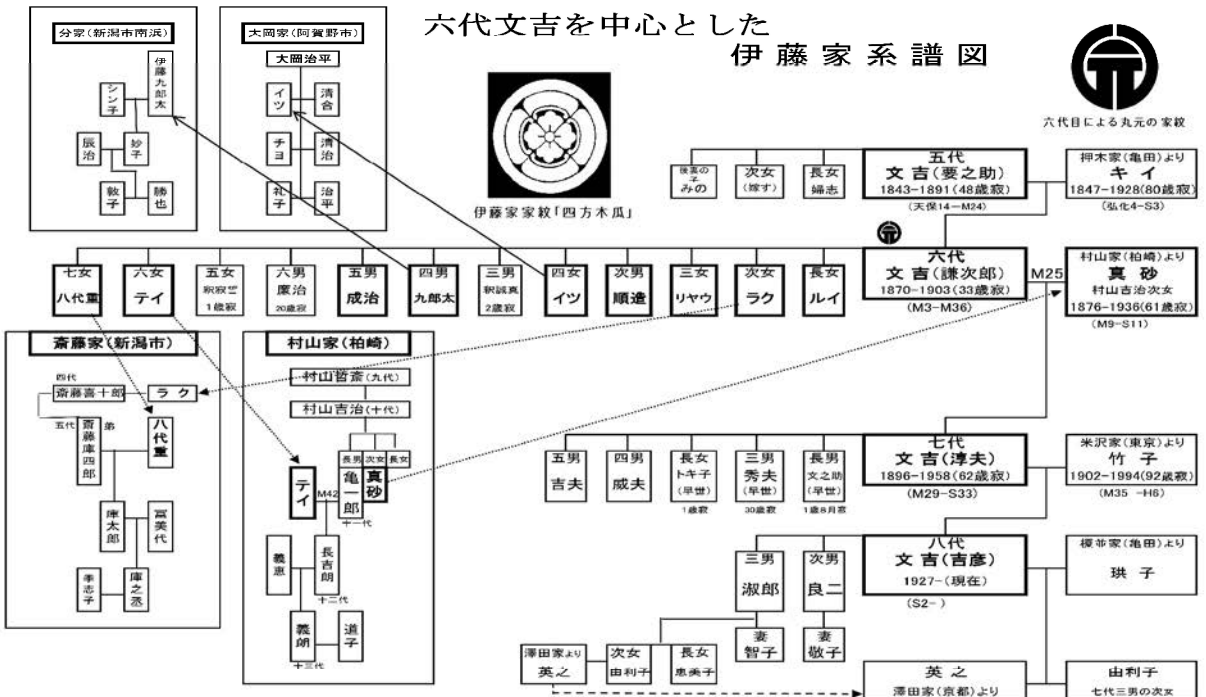
六代文吉を中心とした 伊藤家系譜図



伊藤家家紋「四方木瓜」



六代目による丸元の家紋



いてある。夫妻の悲しみがはかりしれなかったことは想像に難くない。待ち望んだ第一子が生まれることの喜び、そして世継となる長男の成長の記憶をこの艸冊に書き留めていたが、200頁のうちわずか33頁の記録のみで文之助の火葬、葬儀が終わった後からは、この艸冊は残りの167頁すべて空白の未使用のまままで終わっていた。常用していた机上の「矢立」の中の筆はさぞかし重かったであろう。この空白となった和紙の厚みが虫食いの穴とともに六代の悲しみの深さを物語っている。

夫の死後、真砂は絵葉書文化の幕開けと共に、実家の兄、義弟、妹等、親戚との絆を封書から絵葉書に転じ縁者との深い絆をさらに強めていく。

礼状、見舞状、年賀状等のやり取りによる実通便の絵葉書は、交互に伝え送る「通」と、便りという「信」からなる「通信」という役目から、記念記録、収集保存すべきコレクションとしての要素を含みながら隆盛を極めていくのである。晩年の真砂は、絵葉書帖を見ることも一つの楽しみとしていた。出しゃばることなく寡黙さと品を備えた真砂は、ここ沢海の集落の人たちからも敬愛されていた。

1896（明治29）年12月11日、次男淳夫が生まれる。淳夫は、後の七代文吉となり、慶応大学からペンシルバニア大学ウォートンスクールを卒業後、コーネル大学にも籍を置き勉学に励んだ。8年ほど米国に滞在した所帯道具をいくつもの大型トランクに詰め込み、1925（大正14）年、AWATAMARUという客船にて帰国した。道具の中でひときわ大きかったのが、撞球といわれるビリヤード台であった。今も静かに二階の展示室に置かれている。帰国したこの年、淳夫は、京橋、米沢家の娘竹子と結婚。竹子は東京生まれのハイカラな人、自然体で行動すれば、旧家の風習にそぐわない場合もある。そのようなとき、夫七代（淳夫）は、誰の粗相か咎めるが、母真砂は、それは、私が指示したことだと嫁竹子を庇い、また真砂の指示で良い結果のことは、嫁がやったことだと竹子を擁護していた。いつも、嫁を庇う真砂の思いやりの心は、村山家の余胤と教育からくるものであった。

1927（昭和2）年には八代文吉となる吉彦も誕生し、安泰な日々が続くかのように思えた。県下一の大地主としての時代が続いたが1931（昭和6）年、満州事変勃発、続いて太平洋戦争へと移り、1945（昭和20）年終戦。この1ヵ月後七代文吉は、この館を博物館にする決意を固めたのである。

終戦直後、伊藤家の調査に来た進駐軍ライト中尉と七代文吉が会話を交わすうちに偶然にもペンシルバニア大学の同窓生ということが分かった。伊藤家の遺構保存のための法人化への道のりは幾多の困難があったが、この出会いにより財団法人設立に向けて拍車がかかった。その年の10月10日に申請した財団法人設立申請書は却下され、再提出命令を受けていた。



艸冊と矢立（右）



ライト中尉

その後はライト中尉の絶大な支援もあり第二回目の財団法人設立認可申請書は、1946（昭和21）年2月12日に無事許可となった。その影にはもう一人の立役者、伊藤家新潟の別邸（現新潟分館）に寄居することとなる文人會津八一の存在があった。英語教師の経験を持つ八一はライト中尉と接触の機会もあり、ライト中尉に伊藤家の財団法人化への助言もしていた。かくして、わずか終戦から半年後に、財団法人史蹟文化振興会（後の北方文化博物館）が漸く誕生したのである。

出典

伊藤家古文書 設立認可申請書綴附設立登記関係書類

（自昭和20年10月至昭和30年3月）

伊藤家古文書 元浩房攝右艸冊（六代文吉記録覚書帳）1894（明治27）年
新潟県大地主名簿 新潟県農地部農地管理課 1968（昭和43）年3月30日発行
三角亭物語 北方文化博物館 1985（昭和60）年8月3日発行 角田夏雄著



七代夫妻とライト夫妻
左から2人目が七代、5人目が竹子 於：清水園



ライト夫妻（中央）、2列目ライト夫人左隣2人目が会津八一
1948（昭和24）年7月28日 於：北方文化博物館・新潟分館
「国立新潟大学開学の尽力者ライト中尉送別会（新潟大学主催）」



1. 絵はがきが普及し始めた頃

現在のような切手を用いた、重量別、全国均一料金制の近代的な郵便システムが制度化されたのは、1840年からである。イギリスにおいて始まり、その後、各国で取り入れられることになる。はがきは、オーストリア・ハンガリー帝国で1869年10月に発行され、1870年にはドイツ、イギリスで採用され、それ以降各国が続くことになる。絵はがきを可能にする、私製はがきの制度は、1870年にドイツではがきの採用と共に認められ、順次、各国でも採用されることになった。

この私製はがきに絵を入れたはがきの最初は、1870年の普仏戦争のとき、ドイツの A. シュワルツが官製はがきに兵士と大砲を印刷したものだとされる。どちらにしても、戦争をきっかけにして、ドイツとフランスで絵はがきが盛んに使われるようになる。その後、ヨーロッパでは、さまざまな絵はがきが出され収集が盛んになる。

ところで、日本における欧米の郵便制度の本格的移入は、1873年で、私製はがきの発行は、1900年からである。1902年には万国郵便連合加盟25年記念の絵はがきが発行され、人気を呼び、1904～06年に発行された日露戦争戦役記念郵便絵はがきが空前の売れ行きとなり、絵はがきが社会に定着することになる。(1)当時の様子について、書いたものをみてみよう。

「(1904年)八月下旬から戦闘を開始した我軍は、九月初めに遼陽を陥落せしめた。この時の我軍の損害は実に夥しく、今書物で調べて見ると一万七千五百三十九人となっている。非常な激戦で、敵もその割合で死んでいる筈だ。とにかくこれで、この戦争にやや目鼻がついて来たように思われる。沙河の大戦にまた勝った。そういうことのある度に東京市民は戦捷祝いを作り、郵便局では戦捷記念絵はがきを売り出した。(略)この戦捷記念絵はがきに依ってとうとう絵はがきの流行を来し、誰でも絵はがきを買うことが珍しくなくなった。とにかく三枚一組の戦捷記念絵はがきの契機は素晴らしいもので、郵便局へ早く買いに行かないと、じきに売り切れてしまう。熱心な連中は、明日売出すことが知れると、まだ夜の明けない中からおしかけて、郵便局の事務の始まるのを待つという騒ぎだ。誇張でなく江戸橋の郵便局では、押すな押すなという騒ぎだ。群衆の中に窒息して死んだ少年が二人までもあった。多分この秋の頃かと記憶する。煙草が官営になり悪質になり而して俄かに高価になったのは。」(2)

戦時下、あまり多くは語られない人びとの訃報とは裏腹に、戦勝を祝う絵はがきに人びとが群がり熱狂する。当然のことながら、官営絵はがきの刊行、そして煙草の官営化も戦費調達のためのためであった。ところで、しかし、人びとはなぜ、絵はがきにかくもまでも熱狂したのだろう。

佐藤健二は、絵はがきが大衆化する過程には、一つ目として郵便制度に私製はがきのシステムが導入されたことあげ、二つ目に郵便制度そのものが国際的なネットワークをもち、ローカルとグローバルなものをつないでいたことを指摘している。つまり、欧米の絵はがきの流行は、そのまま日本の絵はがきの流行となって広がるような国際的な繋がりが、メディアに内在していた。

そして、三つ目に何事かを記念する絵はがきの誕生をあげている。そこには、戦争という大きな事件が絡み合う。既に述べたように、最初の絵はがきが普仏戦争をきっかけとして発行された慰問はがきであった。また、日本において、絵はがきが定着するのも日露戦争によってである。確かに、絵はがきの内容をみると、戦争と国家の表徴である天皇は、大きな割合を占めている。また、戦争の様子を伝える絵はがきは、その後、事件や天災地異の災害、例えば、関東大震災などの様子伝えるものへと展開していくことになる。

また、一般の庶民にとって、戦争は見ず知らずの異境の地に行くことを意味し、国家規模の人間の移動として、新しい旅の経験となった。旅先の各地の物珍しい風景や民俗などの絵はがきを送ることは、兵士にとって数少ない楽しみであった。こうした気持ちや感情は、旅先で名所旧跡の絵はがきを送る習慣へと転化していく。

また、逆に、残された家族や友人たちは、戦地の兵士となった人びとのことを思って、慰問としてさまざまな物を送った。その中に、芸妓の美人絵はがきがことのほか好まれた。こうした美人絵は浮世絵の伝統を引き継ぐだけでなく、スターのプロマイド写真、さらにはピンナップ・ガールへと発展する。(3)

絵はがきという一つのメディアが社会へ普及するのに、戦争という国民的な経験が必要だったことは、思った以上に重要である。ところで、先の証言で、日露戦争時、戦争に行った友人たちからもらったはがきについて、「軍事郵便としてあって、ただのはがきとは違っているのも何か特別な感じを与えた。正宗は手紙で戦地の寒いこと、荷物を積んで車を引いて行く時はそう苦しくもないが、空車になってから帰る時の寒さが身に沁みて辛いと書いてあった。そして国家のためとは言いながら何故露西亜と戦をしなければならないのか、その意味さえ解らずにこんな苦勞をすることは実に馬鹿らしい、と泣きごとが述べてあった」(4)という。死にたくないというのは、誰もが思う本音である。多分、絵はがきというメディアが爆発的に社会に広がる背景には、勇ましい愛国のかげ声とは裏腹にある人びとの声にならない、声にしてはいけない、小さな怒りがあった。

2. 贈与としての写真、絵はがき

しかしながら、絵はがきというメディアが社会に広がるにあたって、人びとの心の底にあったのは、こうした小さな怒りだけであろうか。少し観点を変えてみよう。

加藤秀俊は、絵葉書は「パリに着いたお嬢さんが、母親や友だちあてに、無事つきましたといったことをほんの二、三行書いて送る。絵葉書というのは無意味なようで意味があり、意味があるようで無意味なものだとし、それは一種の贈答関係として成り立っているとした。そして、その内容は、要するに「私はここにいますという存在証明ですから、それまでの郵便とはまるでちがう」とし、それは、「用件のない郵便」だと指摘する。(5)

ところで、写真研究ではあまり指摘されないが、人びとは自らの写真を撮ってもらった時、プリントし、自分の知り合いに見せたり配ったりする。それは時に、卒業であったり、結婚であったり、子どもの出生であったり、また戦争の出征であったりなど、何らかの人生の節目を伴う。なぜなら、写真はさまざまな人生の儀礼と深く関わっているからだ。

人は誰しも、一人で孤立し生きていくことはできないし、なんらかの集団に所属し、人びとの関係性のなかでしか、自らを社会化できない。個人であれ特定の集団であれ、どこかで他の人びととの共同性を願望し、またそうした共同性に参加しようとする。そのために、自らの社会的位置を確認し、さらには強化するための効果を求めてさまざまな行動をし、またその地位を他の人びとに認識させようとする。

贈り物は、こうした時、社会的関係性を強化させようとする人びとの思いを顕在化させる社会的行動となる。M・モースは、贈り物は任意で行われるが、実際には義務的に与えられ、受け取られ、返礼されるとする。そして、こうした贈与のシステムが成り立つ動因として、呪術的・宗教的観念が、その背景にあるとする。(6)人びとは、信頼の証として贈り物をし、それに何らかのものを送って返礼することで、この信頼が正当であることを認める。これを拒否すれば、友情や交際を拒絶し、不信や敵意を示すことになる。

絵はがきのやりとりも、そうした贈与のシステムを引き継ぐものであり、家族として仲間として、共同性の儀礼として行うものといつてよい。絵はがきを送るものは、また、それを返されることで、その関係性の絆を確かめる。もし、返されることがなければ、沈黙を守ることになる。

3. 伊藤真砂の伊藤家における立場

ところで、伊藤家の絵はがきコレクションは、絵はがきが社会に広がった最初の時期の1905～1913年頃の約10年間のものであり、実際に使われたものが大半を占める。宛名はそのほとんどが伊藤真砂であり、送った人びとは、

伊藤真砂の夫である六代伊藤文吉（謙次郎）の兄姉である伊藤成治、八代重などであり、あるいは伊藤真砂の実弟である村山亀一郎などである。

伊藤家は、明治に入り、地租改正による土地制度や租税制度の改革の大きな過程のなかで大地主となる。1870（明治3）年では約116町歩だったものが、約20年後の1892年には約637町歩となり、さらに1901年には約1,063町歩で、千町歩を越える大地主となる。この土台をつくったのは、五代文吉（要之助）と妻キイである。五代目夫婦は10人の子供たちを育てるが、五代文吉は1891年、48歳で亡くなる。21歳であった長男謙次郎が六代文吉となり、後を継ぐことになり、翌1892年、上越の刈羽郡岡野町の名家である村山家の次女真砂（当時16歳）と結婚することになる。六代目夫婦は、4人の子供たちを育てることになるが、六代文吉は1903年、33歳で亡くなる。七代文吉となる淳夫はまだ7歳であった。そこで、六代文吉の妻・真砂（当時27歳）が親権者となり、六代文吉の兄弟である次男・順造が押木家に婿入りしていたこと、三男は早世していたため、四男・九郎太（当時25歳）が後見人となる体制がつけられる。当然のことながら、五代目文吉の妻キイ（当時56歳）が全体をしきっていたことは間違いない。(7)

伊藤真砂に果たされた仕事は、巨大となった伊藤家の地主経営が円滑に進められるようにキイから実務を引き継ぎ、実際の仕事をする番頭たちの性格をのみ込み、仕事の分担、役割を調整することであった。また、もう一方で、夫の兄姉たちとの友好な関係をきづき、一族の結束を強めることである。親戚関係における当面の問題は、既に嫁いだ年上の長女・ルイ、次女・ラク、三女・リヤウ、四女・イツたちとの家同士の親類づきあいと、年下の四男・九郎太と五男・成治の分家、六女・テイと七女・八代重の結婚であった。

ところで、伊藤真砂と伊藤家にまつわる人びととの絵はがきによるやりとりは、1903年以降、六代文吉が亡くなった時から始まる。それは、世間一般の絵はがきブームと軌を一にするが、それだけではない思い、親族としての責務と愛情が込められている。ここでは、やりとりの多かった五男・成治と、七女・八代重の絵はがきをみてみる。

4. 絵はがきの結ぶ絆と友愛

真砂が伊藤家に嫁入りした時、成治は10歳、八代重は3歳であった。長じて、六代文吉が亡くなった時には成治は21歳で東京帝国大学をちょうど卒業する頃で、八代重は14歳で女性として多感な時期であった。成治は卒業後も東京市牛込区矢来町の家宅に住み、後に分家している。伊藤家の六代目の兄姉たちや真砂も、しばしば東京の成治宅を訪れている。新潟から離れ、日頃顔を合わせないとなれば、手紙のやりとりは必然ともいえるが、成治からの葉書からはそうした事情だけでないものがみえる。

1907年3月12日(消印)付絵はがきの裏面に書き込まれた文章に、「特別上等製珍無類の絵はがき数葉、宛押木兄上、姉上の家、兄上、少妹上のは四人様へ本日小包を以て発送申し上げ候」(NC-C-114-1-039b)とあり、成治が絵はがきの収集、コレクションをしていたことがみえる。また、同年8月9日付け絵はがきの表面には、「物を貯め始めると散りすすきになるのが常で、殷鑑遠からず。母上も爾りですが、姉上はさすがに絵はがきのため主義ならざるだけに、大分よいのを奮発なさるが誠に結構のことです。若し夫れ絵はがきを能く貯へ能く散すことなきの如きは、蓋し天下第一人と申すべき歟」と、真砂が絵はがきを集めることに熱心なだけでなく、丁寧に保管している几帳面な性格を賞賛している。この絵はがきの裏面には、「むし干や 故人の衣 見つめけり 丁未八月九日」(A:NC-C-007-1-028b)と句も記されており、文学的な教養をもっていた成治の文人的な気質もかいまみえる。ちなみに、成治は新潟市古町に生まれた会津八一とは中学の時、同級生で親しく、後に八一は北方文化博物館・新潟分館に居住することになる。

ところで、成治の絵はがき収集はかなり熱狂的なものであったらしい。1909年2月23日(消印)の絵はがきの表面には、「御割愛の絵はがき@@及び最近の一葉たしかに共に拝受頂戴仕り候」と、真砂が大切にしていた絵はがきを成治に贈ったことが記されている。成治は、「美しく珍しく相見仕り、小生のアルバムで一異彩を放ち居り候」(NC-C-001-2-088a)と感激し、真砂の友愛に深い感謝を捧げている。どうやら、真砂は絵はがきを成治のように集めることより、それを通して兄姉たちとの絆を深めることに思いがあったとみえる。当然のことではあるが、真砂にとって、伊藤家の兄姉たちは、新しい家族である。

ところで、絵はがきに対する熱意は、成治だけでなく妹・八代重も同じものがあつた。1906年10月5日(消印)付絵はがき裏面には、真砂の息子四男の威夫に触れて、「威ちゃん絵はがきなくしたそうです、かわりに少し送るつもりでございます」(C:NC-C-114-2-132b)とあり、一族で絵はがきを集めることが話題になっていた様子うかがえる。1908年3月2日、東京に行った八代重は新潟の真砂に絵はがきを送り、裏面に「この絵はがき、おすき?おきらひ?どちらでございませう」(B:NC-C-007-1-133b)かと、姉に甘えるように尋ねている。

真砂は、八代重を小さな頃からかわいがっていたようである。八代重は、真砂が何かやと気を配ってくれることを嬉しいと思い、また頼りにもしていたらしい。その前年の1907年5月23日付(消印)で送った八代重の絵はがきの裏面には、真砂が東京に来られなくなったことを残念がり、送ってくれた荷物にあつた「きれいなきもの御送り下されまことにまことにありがたく姉君様の御心配、御心づくしのほどあつくあつく御礼申し上げます」(NC-C-114-1-088b)と、いつもながらの細かな気配りに

感謝している。最も、1909年3月19日付絵はがき表面には、「恐入りますがまた味噌をおくっていただきたくございます(中へ味噌づけも御願ひいたします)」(D:NC-C-001-1-052b)と、東京に行くと、足らないものがあるとなにやかやと姉に頼んでいた様子もうかがえる。

ところで、八代重の絵はがきを見ていると何故か、自画像的な少女画や美人画が多いことに気づく。1906年10月5日付絵はがき裏面(C)の二人の少女写真には、繊細で自分の将来へ不安をもっている感じが感じられる。1910年11月に、八代重は新潟で同じような千町歩地主である斎藤家に嫁ぐことになるが、1909年3月19日付絵はがき裏面(D)の女優のポートレートにある「今日、木村先生と上野の茶会へまいりました」は、東京で花嫁となるために様々なことを身につけていたものだろう。これに、結婚後の1911年11月29日付(E:NC-C-001-2-014b)、風邪をひいた真砂への見舞い絵はがきを並べてみると、八代重の女性としての心の成長がたどれるようにも見える。絵はがきならではの、面白さといえる。

どちらにしても、真砂のこうした家族への極め細かな配慮は、姑であるキイも同感であつたらしい。東京に八代重と一緒に行き、真砂からの荷物を東京で受け取った1907年5月17日(消印)付絵はがきの裏面には、「昨日に小包有難く受け取り候、毎度ながらも御面倒掛け候」(F:NC-C-114-1-085b)と簡潔に記している。あまり筆まめでなかったキイとしては珍しく絵はがきを使って、感謝を述べたものである。キイは、この絵はがきで表面の下に文章を書かず、裏面の神女の画の顔の部分に小さく書いている。いかにも、信仰心の厚かつた人らしい感覚である。

こうしたやりとりからは、家族の人たちのそれぞれの小さな喜びや、感謝の思いがみえてくる。その意味で、真砂が絵はがきを使うことを大切に、一族の結束を強めるコミュニケーションのツールとしていたことが分かる。こうした時、絵はがきは日々の小さな友愛と信頼の証となり、フラジャイルで切れ切れになっしまいかねない一族の気持ちを繋げる、しなやかな伸縮自在なツールとなる。それは、伊藤家だけではない。多くの人びとの家で、秘かに、小さな喜びと、時に小さな怒りをと伴った行為として、社会と家族を結びつける。絵はがきは、こうして社会に普及し、人びとの心の底へと降りていくことになる。

注
 (1)平凡社(1993):『世界大百科事典』目次デジタル平凡社
 (2)生力館(1928):『明治大正歴史』中央公論社、1978、pp.169-170。
 (3)佐藤健二(1964):『絵はがき家』『風景の生産・風景の解放』講談社
 (4)生力館(1928):『明治大正歴史』前掲、p.156。
 (5)加藤秀俊・前田豊(1980):『明治メディア考』中央公論社、pp.180-182。
 (6)Marcel Mauss(1988):『社会学と人类学』有地亭能訳、弘文堂、1973
 (7)海田慶夫(1970):『贈与論』『社会学と人类学』有地亭能訳、弘文堂、1973
 (8)海田慶夫(1970):『贈与論』『社会学と人类学』有地亭能訳、弘文堂、1973
 (9)海田慶夫(1970):『贈与論』『社会学と人类学』有地亭能訳、弘文堂、1973



A:NC-C-007-1-028b



B:NC-C-007-1-133b



C:NC-C-114-2-132b



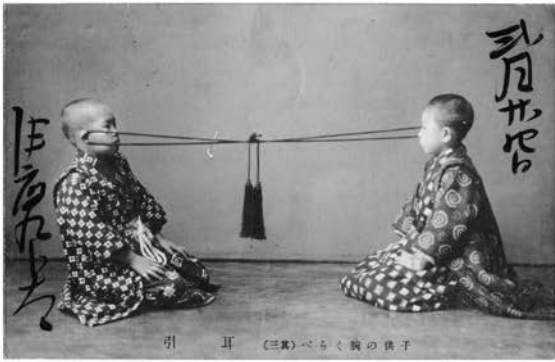
D:NC-C-001-1-052b



E:NC-C-001-2-014b



F:NC-C-114-1-085b



NC-C-007-1-126b

子供の腕くらべ(其三)耳引



NC-C-007-1-130b

子供の腕くらべ(其五)首引



NC-C-007-1-131b

子供の腕くらべ(其四)指引



NC-C-007-1-139b

子供の腕くらべ(其六)掛引



NC-C-001-1-192b

(佐渡國畑野村字三宮)三宮神社



NC-C-114-3-06b

聯合艦隊ノ主力的艦隊ニ向フ



NC-C-001-1-129b

故乃木大將葬儀行列



NC-C-001-1-117b

大阪中之島 日本銀行



NC-C-001-1-171b

哈爾賓ニ於テ韓国兇徒ノ為ニ銃殺サレシ故伊藤公爵



NC-C-114-1-002b

秋桜



NC-C-001-1-079b

花と女性



NC-C-114-2-052b

華巖の滝



NC-C-114-1-027b

シャトーランの老女 (仏・フィニステール)



NC-C-001-1-048b

ねずみ

池上秀敏夫人・緑猷画
(五代文吉五男・成治の義母)



NC-C-007-1-180b

赤ん坊



NC-C-001-1-088b

飛行機隊並行の美観 (ファールマン式復楽飛行機)



NC-C-001-1-157b

織田三郎信孝



伊藤家明治の絵葉書「軌跡」

当時の郵便事情を探り、新たなコレクションの魅力进行解明する。

伊藤家明治の絵葉書展「軌跡」細江英公人間写真展「気骨」今成家写真展「草莽」
総合プロデューサー・ディレクター 石井 仁志(メディア評論・写真史研究)

絵葉書が収納してある数冊のアルバムの体裁をまのあたりにして、その豪華さから内容も未だ見ないうちに期待感が膨らんだ。しかも土蔵の中でしっかりと保存され、当時の美しいつやが紙に残っている。とにかく奇跡的な保存状態だ。アルバムの1ページ目、最初の絵葉書を手にとって見ると実際に通信文が書かれ、切手が貼られ、当時の消印が押されている。「うっ！」と思わず声が出た。絵葉書コレクションとしては珍しい実通便の収集であったのだ。新潟大学人文学部GP授業の一環として、「地域映像アーカイブ」の発掘作業の途上で、ここ北方文化博物館に眠っていた明治期の絵葉書群に光が当たった。このときの調査にも同席でき、学生諸君に実通便の解説や資料の扱い方などをレクチャーできたことも幸いであったが、わたくしはこのコレクションの特異性を理解しつつ目の前のアルバムに美しく並んだ絵葉書の画像にどんどん引き込まれていった。しかもスキャニング作業の進行につれ、文面の文言にも注意を喚起され、更にはその時代の伊藤家と親類縁者のつながりの一端をコレクションから強く感じるようになった。それにしても、ここに残された絵葉書を伊藤家に送った人々のなんと筆まめなことか、そしてペン書き、墨書を問わず、個性的であり達筆であることか。特に墨書の旧かな、当て字、行書体、草書体にいたっては、判読が極めて困難であった。にもかかわらず判読できた文面からは、当時の人々のいきいきとした生活の一端、日常の心配り、四季の移ろい、行事や旅、身のまわりに起こった事件や事象に対して細やかな通信がなされている。一見、画一的ともいえる年賀状のやり取りにさえ肉筆の優しさがこもり、雅趣が漂うのである。つまりこの残された絵葉書の総体から感じ取れる事象こそ伊藤家六代目文吉の妻で夫の夭逝後を支えた真砂の感性がつくり上げた伊藤家の時代相といっても過言ではないだろう。まさに才色兼備の明治女性の面影がこれらの実通便絵葉書を通した手紙のやり取りからそこはかたなく浮かんでくるのだ。唯一つ残念であるのは真砂自身の発信、返信を確認できぬことであろう。願わくは、この伊藤家の親類縁者のなかに真砂の手になる書簡や絵葉書を保存していた人物もいて将来往復書簡の形で絵葉書のやりとりも解明できるとすればなお素晴らしいことと思う。

彼女が編んだであろう絵葉書アルバムを注意深く見てみると、発信者の絵葉書の画像の選び方や文章の書き方、画面のどこに文字を配しているかなど非常に興味深く、それぞれの絵葉書の送り手の人物像が垣間見られ、絵葉書を見ながらまるでそれを送った人物に会っているような感覚をしばしば覚えるにいった。なおかつこのア

ルバムの選者の感性、どのような絵葉書をアルバムに残したかによって画像の種類や、興味の対象や、嗜好がうかがい知れるように感じた。こういった実通便絵葉書のコレクションはより数がまとまることによって、なおはっきりとした収集の特性が明らかになると思われるので、更なる発掘調査がなされることを期待してやまない。

わたくしにとって、明治期の郵便事情を底辺に据えた大規模な資料調査は2度目のことである。ライフワークである中島健蔵研究(書誌研究)の中で、中島自身が郵趣協会の初代会長であり、かつ小判切手の消印から当時の全国の郵便局名をつきとめるという遠大な計画の実行者であったこともあり、わたくしも明治・大正期の郵便事情を調べざるをえず、当然のことながら伊藤家のコレクションを含むこの時期の絵葉書流行の歴史もある程度は認識していた。だが実際に豊富な現物をこうして眼前にすると当時の文化を包含した温かみのある素朴な画像の力、印刷、エンボス加工などの技術力に驚かされるばかりだ。この絵葉書群を保存してくれた真砂夫人が、ひとりで絵葉書帖を管理してアルバムを形成したのか。この蒐集にどれほどの熱意と工夫とを費やしたか、更に彼女にとって、この行為の積み重ねが趣味といえる領域だったのか、それとも実用の延長線上に収集されたものだったか、これは今となつては推測する以外には手はないが、少なくともこれだけの枚数をまとめた実通便絵葉書コレクションは全国でも極めて珍しいと思う。ともあれ、実通便、未使用を問わず彼女の明確な意思によってアルバムに整理して保存された絵葉書群は当時の通信事情、郵便制度の中の絵葉書ブーム、現代に置き換えるならメールやツイッターの役割に近い絵葉書通信の実情を知る上で極めて貴重である。

とはいえこれらの発見された実通便の当時の郵便事情に鑑みた調査はまだ始まったばかりで、整理もなされていない。しかし、調査の方向性、可能性はある程度示しうると考えるのでそれを掻い摘んで列挙してみよう。いわば実通便絵葉書の新たな魅力を付加研究するための序論である。伊藤家の六代目文吉夫人真砂による1905年から1913年までの絵葉書コレクションを当時の郵便事情の中で分析すると、まず未使用の絵葉書の宛名面に私製絵葉書の製造販売元が小さな字で印刷されている。それはときには印刷会社であったり、製造販売会社であったりと多種多様である。切手を貼る場所指定の四角点線内には内国一銭五厘、外国は四銭の切手を貼るよう指示が印刷されているものもある。特に戦争絵葉書にはこの印字が入っている。画面側にも広告用に発行し配布した会社名が印字されているものもある。また、これらの広告絵葉

書はシリーズ化された物によってはかなりの枚数の絵葉書が一枚の大きな紙に印刷され、点線で容易に切り離せるようになっていたと思われるものもある。土産にという絵葉書の性格からこういった印字は欧文で印刷されたものも多い。将来これらの印刷文化や、流通面の研究のためにも前述したような要素を見逃さずに整理するべきであろう。実郵便絵葉書の宛名面では、何とんでも切手および消印を中心とする変化に注意が必要だ。伊藤家絵葉書では次のような事象が確認できる。

当時の主要な切手は菊切手と呼ばれる。菊切手は凸版印刷で印刷されその名称の根源となる菊の御紋章が中央に大きく配された切手群であり、1899年から1907年にわたって製造された。菊花紋は天皇の象徴であり、かつ強大な国家権力を表していた。日清戦争の勝利などにより侵略的国粹主義の高まりといった風潮が影響したことは否めない。しかも日本社会は産業革命期ともいべき時期にあたり、通信手段としての郵便事業も格段の飛躍期になっていた。勢いそのままに菊切手製造のための要件通達のひとつには欧文による国名を断然省くというものもあったという。更には贖物の発生を防止するために製版過程で機械彫刻の規格化が徹底された。この菊切手群が伊藤家絵葉書の実郵便に使用されたのであり、保存されたもののほぼ全ての切手が菊切手である。つまりこの事実こそ伊藤家絵葉書の年代を推定から事実上に格上げしているのである。次の田沢型大正白紙切手の最初の製造が1913年であるから、ぴったりと実郵便の年代が規定されたことになる。さてこの時期の国内郵便の料金は私製絵葉書で一銭五厘であった。菊切手の一銭五厘額面は大きく分けて2種類、刷色が灰色がかった青のもの*と、暗い濃いめの紫のもの**1である。前者は1900年10月発行、後者は1906年5月から売り出された。つまり、にぶ紫と呼ばれる後者の切手が貼られた実郵便絵葉書は少なくとも1906年5月以降の使用であり、例えば消印が判読不能でも年代は類推される。ただし前者は後者発行後もずっと使用されているので注意が必要だ。伊藤家の私製絵葉書は当然この色別にして2種類の切手貼りのものが主流である。更には一銭五厘の切手一枚貼りとは限らない。一銭赤茶と灰色の五厘切手の2枚貼り***、五厘切手のみの3枚貼り****も見られる。ちなみに、郵趣の世界ではこういった実郵便のエンタイヤがオークションなどで取引されるのだが、貼ってある切手の種類、枚数(額面)、消印の種類などで評価が変わる。つまりは伊藤家絵葉書の実郵便はその一枚一枚に付加価値もあり、物によってはかなりな高額のものも存在する可能性があるのである。話が横道にそれたが、それぞれの使用葉書をこういったエンタイヤの種類別としての観点から分類しておくことも大切である。切手の色で大きく二つと分類したが、実は目打ち(切手周囲のギザギザ)の数や紙など細かな分類はまだ存在する。しかし、伊藤家絵葉書の実郵便の分類や研究では、これ以上の詳細な分類は困難を伴い必要を感じない。むしろ、これから述べる消印の読み解きこそ

欠かせない作業であろう。まず第一に1905年から1913年の間に使用された主な消印を紹介しよう。丸一型日付印、楕型日付印の2種がもっともポピュラーであろう。**2この2種の消印にもいろいろ種類があるが、煩雑になるので解説は省く。殆どの私製絵葉書宛名面には、切手上とその他の面に2ヶ所の消印が押されている。これは郵便局、すなわち集配局と、配達局の印である。それぞれの局が丸一型消印を押すだけではなく、物によっては丸一型と楕型が押されたり、丸二型が押されたりと消印はバラエティーに富んでいて面白い。とにかくどの消印が宛名面にあっても、そこから汲み取れる情報が大切であることに変わりはない。どこで何年何月何日に出された郵便か? いつ受け取ったか。これが消印から読み取れる。がしかし消印は判読できるものが意外と少ないのも事実である。特に場所、局名が判読できるものはありがたい。



(*)
灰青・1銭5厘菊切手に丸一型日付印

にぶ紫・1銭5厘菊切手 (**1)

(**2)
丸一型日付印(右)
楕型日付印(左)



(***)
1銭と5厘の菊切手2枚貼り
丸一型日付印と丸二型少数印



(****)
5厘菊切手の3枚貼り
丸一型日付印で消印

例外はあるものの伊藤家絵葉書では本宅宛が多いため配達局印は時期によってほぼ同じ消印が使われていることが読み取れる。消印にはまるで個性と表情がある様に見える、いろいろな情報を読み取ることができるのだ。伊藤家絵葉書の中で、数はぐっと少なくなるが、鉄郵印（鉄道郵便印＝路線名や時刻が読み取れる）が押してあるものや、切手の貼り忘れなどで、未納印が押されたものもある。これらのエンタイヤの郵趣的評価は、汚れなどの度合いにもよるが、数千円から物によっては一万円を超えるものもあるという。

値段もさることながら当時の郵便事情や歴史をも含めて、こうした通信内容をかかわった人々の心情も汲みつつ紐解いてくるとつくづく六代文吉の妻、真砂が伊藤家の所帯を背負って奮闘していたことが、まるでつい昨日のように思えるほど響いてくる。それにつけても様々な魅力を抱え込んだ伊藤家明治の絵葉書コレクションや新潟各地の貴重な資料がより多角的な分析を受ける為には新潟大学人文学部地域映像アーカイブのGP授業で続けられている資料のデジタル画像化（スキャンニング作業）や地道な資料発掘作業がより一層必要不可欠になるだろう。そして見えてくるアーカイブスの未来、多様性こそがこれからの人文科学、文化構築の大いなる指針となると、わたくしは信じている。



NC-C-001-1-144b 初代の新潟万代橋



NC-C-001-1-184b 佐渡國新町ノ景

伊藤家明治の主なできごと

西暦	和暦	できごと
一八六九	明治二	藩籍奉還により沢海の旗本小浜知行所の陣屋が接収される。五代文吉は知行所御用達を廃業となる。
一八七〇	明治三	十二月二十五日、謙次郎(後の六代文吉)が生まれる。
一八七三	明治六	藩原平野の千町歩地主、市島、白勢、田巻ら、楠本興吉の呼びかけで第四国立銀行設立の主体となる。
一八七五	明治八	八月二十九日、三代文吉(前名、為次郎)が亡くなる。八十四歳。
一八七六	明治九	八月十六日、村山真砂(後の六代夫人)が生まれる。
一八八二	明治十五	現在に残る伊藤邸の着工。大工の棟梁は斎藤金蔵。
一八八五頃	明治十八頃	土蔵門(現在の博物館正門受付)が建てられる。
一八八七	明治二〇	伊藤邸、十一月に上棟。
一八八九	明治二二	造作、壁、建具、畳等が整い、伊藤邸の工事が完了。
一八九一	明治二四	謙次郎の番房(元活房)竣工。設計は謙次郎。棟梁は斎藤金蔵。(元活房は三角間と呼ばれた後、昭和二十年過ぎに現在の三楽亭と名付けられる。)
一八九一	明治二四	新発田(しばた)のかつての大名清口藩の清水谷下屋敷(現在の清水園)を買い上げてもらいたい旨の申し入れがあり、これを受ける。
一八九一	明治二四	十二月二十九日、五代文吉(前名、要之助)が亡くなる。四十八歳。妻キイ四十三歳、謙次郎二十一歳。
一八九二	明治二五	一月八日、謙次郎相替。
一八九二	明治二五	翌九日、改名許可届出。謙次郎が六代文吉を襲名。
一八九二	明治二五	六代文吉(前名、謙次郎)と村山吉次(次女真砂が結婚。真砂十六歳、六代文吉二十二歳。)
一八九四	明治二七	三月二十九日、六代文吉の長男文之助が生まれる。日持社(絵馬、文之助丸の扁額を奉納。翌年の明治二八年十月二十八日、天折(歳八ヵ月)。
一八九六	明治二九	十二月十一日、六代文吉の次男淳夫(後の七代文吉)が生まれる。
一八九五頃	明治二八頃	のちに「日本の石油王」と言われる中野實(に石油探掘資金を融通。)
一八九七	明治三〇	新潟商業銀行(後に新潟銀行)が斎藤喜十郎(五代文吉の次女ラウ)が嫁ぐによって設立。
一八九八	明治三一	十二月二十四日、六代文吉の三男秀夫が生まれる。
一九〇一	明治三四	四月五日、六代文吉の四男威夫(後の第一番頭として務める)が生まれる。
一九〇三	明治三六	六月十一日、六代文吉(前名、謙次郎)が亡くなる。三十三歳。妻真砂、二十七歳。
一九〇三	明治三六	同年七月六日、八歳の次男淳夫が七代文吉を襲名。叔父の伊藤九郎太が後見人となる。
一九〇三	明治三六	十二月二十三日、六代文吉の五男吉夫が生まれる。
一九〇七	明治四〇	伊藤家の菩提寺である光園寺の改築にあたり、六代文吉の母キイの意向により、多額の寄進を行う。
一九二二	明治四五	二階建ての座敷を新築。元活房(現在の三楽亭)は北へ移築し、離れとなる。
一九三六	昭和十一	二月八日、六代夫人真砂が亡くなる。六十一歳。



アルバム単位で見た伊藤家絵葉書資料の概要について

(新潟大学人文学部GP授業の成果、卒論より)

新潟大学人文学部卒業生 佐藤 将太

アルバム 資料番号001-1

計196通収録。エンジ色の下地にエンボス加工された花と蝶の表紙で、片側2通、見開きで4通の絵葉書を収納できる。年代は1909年が107通と最も多く、空白を挟み1912年のものが54通。ある程度同じ時期に届いたものがまとめて保存されているがランダムに並べられている。受信者は六代目伊藤文吉（謙次郎）の妻である真砂の葉書が多く126通となっている。送信者では、謙次郎の弟で五代目文吉の五男にあたる伊藤成治（東京に分家）が最多で64通、次に村山亀一郎（謙次郎の妹テイの夫）の14通、斎藤八代重（謙次郎の妹、斎藤庫四郎へ嫁す）の8通、のちの七代目文吉である伊藤淳夫の6通と続く。受信者と送信者を関連付けてみると、「受信者：真砂——送信者：成治」が最も多く61通である。次いで「真砂——亀一郎」が8通、「真砂——淳夫」が6通である。被写体では、人物の写ったものが計73通、そのうち美人絵葉書は31通となっている。何らかの建物や風景が被写体となっているものは32通あったが、「名所」として確認できる絵葉書は9通（社寺・仏閣絵葉書2通）である。また写実絵葉書が65通であるのに対して、絵画絵葉書が83通と多く含まれている。

アルバム 資料番号001-2

計235通収録。厚手の表紙でページ数も多く、1ページ内には絵葉書が縦に2通、横に1通入る。大半の絵葉書が正しい上下方向に保存され、同系統の絵画絵葉書などは同ページに保存されている。このアルバムは少々特殊で、前半に実通便絵葉書が、後半に未使用絵葉書が保存されていた。表書きのあるものが115通、ないものが120通であった。表書きのあるものについては、1909年と1912年の絵葉書が中心である（それぞれ41通、29通）。前半に1912年のもの、後半に1909年のものが片寄って配置されているのが特徴だ。受信者は真砂が最多（85通）で、文吉と真砂の連名で送られてきたものが13通と多かった。送信者は成治が39通、亀一郎・八代重が11通。受信者と送信者との関連では、「真砂——成治」の31通が最も多く、以下は「真砂——八代重」の9通、「真砂——亀一郎」の7通となる。内容は絵画・その他絵葉書に分類されるもの（動物の絵などの印刷）が多く、美人絵葉書や風景絵葉書も含まれている。また後半の表書きのない絵葉書は、半数の60通が美人絵葉書で残りも、大半が人物を被写体とする絵葉書であった。

アルバム 資料番号007-1

計201通収録で、保存された絵葉書は1907年から1908年にかけてのものが多く（それぞれ64通、96通）。1908年は年賀状も多く保存されている。このアルバムは前半が1907年、後半が1908年と時系列順に整理されている。間を置いて挟み込まれる1912年の葉書などは、アルバムの編纂者が後から挿入した可能性があり、作成ののち数年の間は閲覧行為がなされていたと考えることができる。これは他のアルバムでも同様である。受信者はこれまでのアルバムと同じく、真砂が最多である（126通）。送信者も、成治（64通）、亀一郎（14通）、八代重（6通）となっている。受信者・送信者をみると「真砂——成治」40通、「真砂——亀一郎」28通、「真砂——八代重」10通となる。また成治が文吉と真砂とを連名にして宛てた葉書が21通みられた。内容は美人（人物）絵葉書がメインである。名所・風景絵葉書もみられるが、アルバム各所に点在している。その他絵葉書のうち、1908年正月の年賀状を数ページにわたり見開きで揃えて保存している様子もみられる。写実・絵画の内訳では、写実絵葉書の68通に対し絵画絵葉書が129通保存されている。



NC-C-001-2-DSCN0249

アルバム 資料番号114-1

計104通収録。厚手の表紙であるがページは厚手の割りに弱い。見開きで4通の絵葉書を保存、空欄は見られなかった。年代は、ほぼすべての絵葉書が1907年であった。消印の日付でみると、これらの資料が007-1のものより少し前の時系列に位置していることがわかる。受信者は変わらず真砂が51通と多いが、同時に文吉と真砂連名のもの47通と多く保存されている。送信者で多いのは成治32通、亀一郎13通、八代重8通。文吉と真砂の連名に宛てて成治が送った葉書が18通と最も多く、以下「真砂——成治」の11通、「真砂——亀一郎」の10通、「真砂——八代重」の8通となる。特筆事項として名所絵葉書や社寺・仏閣絵葉書には「記念スタンプ」を押印したものが多くみられた。



NC-C-114-1-DSCN0314

アルバム 資料番号114-2

計145通収録。矢の装飾に「葉書帖」「POSTCARTEN ALBUM」と記された表紙で、見開きで4通の絵葉書が収録されている。1905年、1906年の絵葉書が多く保存されているアルバムである。受信者の大半はこれまでと変わらず真砂であるが、このアルバム中の真砂宛の絵葉書のなかには、新潟の伊藤家の住所に宛てたもののほかに、東京の成治の住所で真砂宛に送られた葉書、同地区の大学病院の住所に送られている葉書が多く含まれている。送信者別では八代重19通、成治16通、亀一郎12通のほか、田中正雄（五代目文吉長女ルイの夫）が12通、伊藤家を出て亀一郎の嫁となったテイが7通、成治の妻である俊子が6通、主に真砂に宛てた絵葉書を書いている。受信者と送信者の関係別では「真砂——八代重」の18通、「文吉・真砂（連名）——成治」の11通、「真砂——亀一郎」の10通が、多くのやりとりを確認できる組み合わせである。内容面での特徴は、花鳥絵葉書の比率がアルバムの中で最も多いということである。また絵画絵葉書の枚数も、145通中103通と多い。またこのアルバムには、次の114-3のアルバムが挟まれた状態で保管されていた。

アルバム 資料番号114-3

計9通収録。1ページに1通の葉書を収録する形式で、ページそのものに絵葉書を録取るような装飾がなされているのが特徴である。表書きがないため年代の特定はできない。内容は主に軍艦や看護隊の写真がフレームに印刷された戦没記念の絵葉書だが、アルバムの前半部分に数通、間があいた状態でまた数通となっており、ほとんどは空白である。



NC-C-114-2-DSCN0097

アルバム 資料番号115-1

計66通収録。厚紙に穴を開け、紐を通して括った装丁である。すべて年代は不明である。全アルバム中唯一、プロマイドを含むコレクションアルバムであり、被写体は海外の俳優・女優である。またアルバムにただ挟み込まれていたプロマイドや絵葉書もみられた。

アルバム 資料番号115-2

計100通収録。名所絵葉書、および社寺・仏閣絵葉書が意図的に蒐集されたアルバムである。宮島・須磨寺・三十三間堂・清水寺・伊勢・名古屋・箱根・鎌倉・江ノ島と実に様々な地域の絵葉書が全体の8割を占める。すべて年代は不明であるが、1895年に、謙次郎と真砂が70日間の京都・奈良・伊勢を巡る新婚旅行に出掛けたという事実があり、それが絵葉書の地域と一致することから、道中に入手・保存された絵葉書群である可能性がある。

アルバム 資料番号115-3

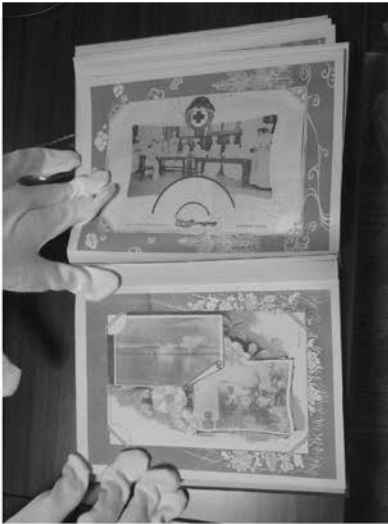
計28通収録。後半のほとんどは空欄である。すべて年代は不明。動物や人物の絵画絵葉書が中心となっている。前半に動物のポストカード、次いで和装・洋装が織り交じった人物の絵葉書群が保存されている。このアルバムに限らず、絵の描き手が同一らしいものは丁寧にまとめて保存されている。同シリーズの作品をまとめることで、物語を形成している見開きがみられる。アルバム編纂者の遊び心が見て取れるようである。

「アルバム」という単位

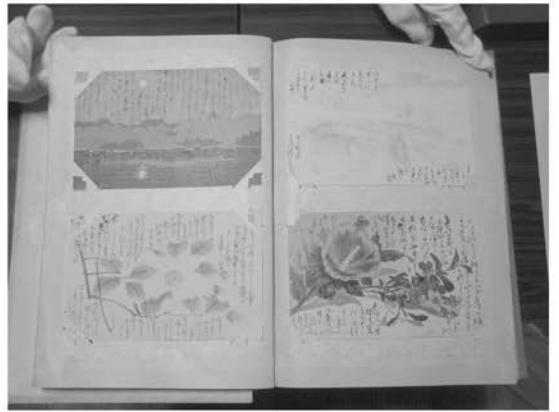
絵葉書を冊子にまとめ、編纂するという行為が発生するのが「アルバム」という単位である。そこには編纂者の意図が見え隠れする。例えば美人絵葉書や俳優プロマイドの蒐集という行為を通して美男美女を所有するというコレクションの欲望が伊藤家においても顕現していた。通常、アルバムに保存する際には、葉書を届いた順に表紙の側から入れていくため、一冊のアルバムには時間の流れが残る。しかし、伊藤家のアルバムには、前後の絵葉書の年代に差があったり、逆になった箇所が多く見られる。これは編纂者（真砂）がメディアとしての葉書の使用法に基づいて保存（送受信の時系列を揃え書込みの内容を整理）したのではなく、絵葉書の絵柄を関連付けることを重視してアルバム化したと考えられる。年賀

状のように、他のアルバムの中にも意図的に編集したとみられる箇所を確認できる。アルバムの再読を意識し絵葉書を美しい状態で保管しようとする、真砂の几帳面な性格がうかがえる。全体を通じて、1910年～1911年の絵葉書の量が少なかったが、北方文化博物館には今回扱ったもの以外にも未整理の絵葉書アルバムが多く残されており、それらの中にこの空白を埋める絵葉書群が保存されている可能性は大きい。また、今回分析を行ったアルバムには、先に述べたように成治・亀一郎・八代重などの新しい人物からの絵葉書が多く保存されていたが、たとえば今回のものとは別の送信者から送られた絵葉書をまとめ、アルバムとして保存しているということも考えられるであろう。

(文責 石井仁志)



NC-C-114-3-DSCN0035



NC-C-114-2-DSCN0116

歴史年表 ※新潟市ホームページ歴史年表より

西暦	和暦	新潟市の主なできごと	日本の主なできごと
一八六八	明治元	新政府が新潟を開港。	明治維新(明治元)
一八七三	明治六	新潟遊園(後の白山公園)が開園する。	版籍奉還(明治二)
一八七四	明治七	第四国立銀行開業。新潟川汽船会社が新潟―長岡間に蒸気船を運航する。	廃藩置県(明治四)
一八七五	明治八	阿賀野川に横雲橋(長さ約310m)が架けられる。	樺太千島交換条約(明治八)
一八八〇	明治十三	新潟町で町の半分が焼ける大火。	西南戦争(明治一〇)
一八八一	明治十四	西郷通に新潟区役所(後の初代新潟市役所)庁舎が落成する。	内閣制度発足(明治十八)
一八八三	明治十六	県会議事堂(現在の県政記念館)が建てられる。	ノルマント号事件(明治十九)
一八八六	明治十九	初代萬代橋(木橋、長さ約782m)が完成する。	大日本帝国憲法(明治二二)
一八八九	明治二二	市制・町村制が施行され、現市域に二市(新潟、五町(沼垂・新津・白根・魚田・小須戸)、一八村)ができる。	足尾銅山鉱毒事件(明治二四)
一八九五	明治二八	日本石油会社が付湯新潟鉄工所を設立する。	日清戦争(明治二七)
一八九六	明治二九	横田切れ、木津切れと呼ばれる大洪水が起こり、蒲原全域が被害を受ける。	下関条約(明治二八)
一八九七	明治三〇	北越鉄道(現越後線)の沼垂―ノ木戸(三乗市)間が開通する。(一九〇四年、新潟駅に延伸)	日英同盟(明治三五)
一八九八	明治三一	火力発電の開始によって、新潟で初めて電灯がともる。	日露戦争(明治二七)
一八九九	明治三二	新潟油田で日本石油が機械掘りによる出油に成功。新潟油田が全盛期を迎える。	ポーツマス条約(明治三八)
一九〇七	明治四〇	越佐汽船会社が新潟―ウラジオストク航路を開航する。	赤旗事件(明治四一)
一九〇八	明治四一	新潟市で二度の大火(三月、九月)、初代萬代橋が焼失する。	
一九〇九	明治四二	二代目萬代橋が完成する。	
一九一〇	明治四三	二代目市役所庁舎が完成する。	
一九一四	明治四七	沼垂町と合併する。市内初の常設の活動写真館が開業。	
一九二四	大正十三	沢海の伊藤家の所有地が一三四六町歩(約1,346,512㎡)になる。	



NC-C-114-1-034b2
歌川豊斎筆浮世絵(2枚1組)



NC-C-114-1-033b2
歌川豊斎筆浮世絵(2枚1組)



NC-C-114-1-074b 富山懸凱旋 祝賀記念



NC-C-007-1-193b
澤村宗十郎の扮装 梶浦の妻富江



NC-C-001-1-007b 水着の女性たち



NC-C-007-1-077b 鏡もち



NC-C-001-1-110b
I am waiting to hear from you



NC-C-001-1-036b 踊る男女



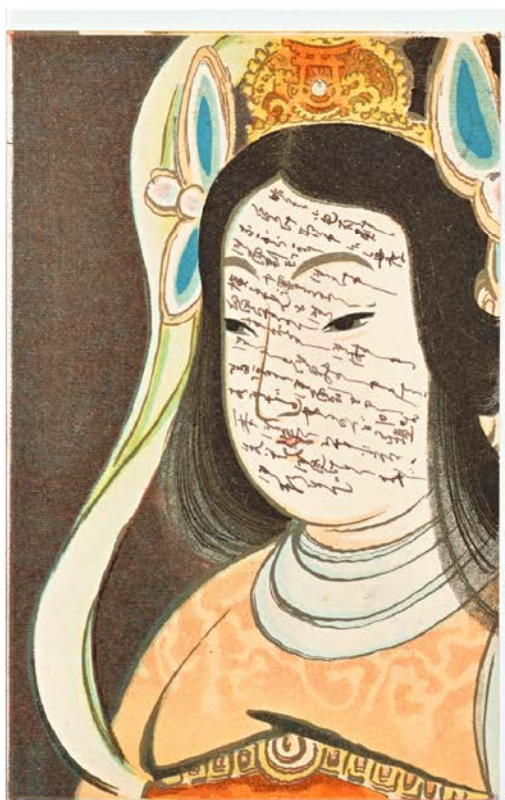
NC-C-007-1-060b 豚とクローバー



NC-C-114-3-01b 戦没紀念 篤志看護婦人会總裁閑院宮妃智恵子殿下



NC-C-114-2-062b 三越呉服店 時好絵葉書



NC-C-114-1-085b

神女



NC-C-001-2-161b

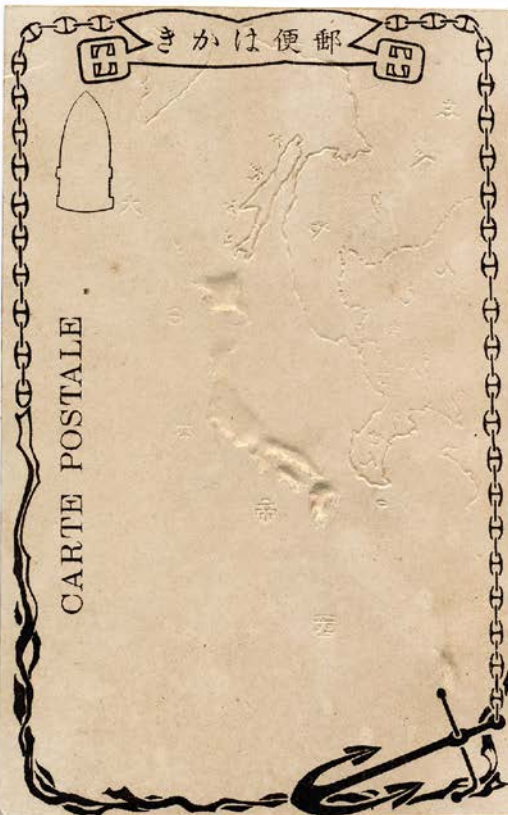
竹久夢二 銀杏の木に寄りかかる女



NC-C-113-1-014b
 東京市降電記念・帝国大学教授田中博士實寫大電断面



NC-C-113-1-014a
 東京市降電記念・帝国大学教授田中博士實寫大電断面



NC-C-114-3-03a
 大日本帝国



NC-C-114-3-03b
 大日本帝国

原田健一（はらだ・けんいち）

新潟大学人文社会・教育科学系 教授



1956年東京生まれ。東洋大学大学院社会学研究科博士課程修了博士（社会学）。専門は映像社会学、メディア文化史。映像・音楽の制作をするも、40代に南方熊楠旧邸の調査に従事することになり、研究の世界に入る。このプロジェクトでは映像の発掘や調査、データベースの作成などをおこなう。著書としては『占領期雑誌資料大系・大衆文化編全五巻』（岩波書店2008～2009年、共編）、『映像社会学の展開』（学文社2007年）、『南方熊楠 進化論・政治・性』（平社2003年）など。

佐藤将太（さとう・しょうた）



1987年、新潟県生まれ。新潟大学人文学部情報文化課程情報メディア論履修コースにて、故郷である新潟とメディアの関係性について学ぶ。原田健一教授に師事し、卒業論文として伊藤家の絵葉書を取り上げ分析を行ったほか、「地域映像アーカイブ」構築プロジェクト等にも携わる。2011年3月卒業。

石井仁志（いしい・ひとし）

20thメディア評論・メディアプロデューサー



1955年宮城県仙台市生まれ。アテネ・フランセ高等科修業。占領期雑誌研究、近現代文化史研究および評論（写真、映像、音楽）、中島健蔵研究をライフワークとしている。写真分野では木村伊兵衛研究、細江英公研究を中心に現代若手写真家の作品研究および展覧会、個展のプロデューサー、キュレーターなどを務める。清里フォトアートミュージアムのヤングポートフォリオを毎年支援している。幅の広い芸術分野の融合、文化サロンの構築を目指し、言論活動を展開している。岩波書店『占領期雑誌資料大系・大衆文化編全5巻』の編集・執筆を担当。

佐藤隆男（さとう・たかお）

北方文化博物館統括室長・学芸員



1950年生まれ。新潟大学経済学部経営学科を経て、新潟大学大学院現代社会文化研究科博士前期課程未満期退学。1988年～2005年八代伊藤文吉秘書、2010年まで管理部長。1987年～2005年屋根裏ギャラリー企画展示を担当、収蔵品6300点の管理、保管整理及び所有の重文、国指定名勝、登録有形文化財の保存修繕計画等を担当。八代伊藤文吉と各種会議で世界を回り、グローバルな視野感覚を養う。

伊藤家 明治の絵葉書展

6代伊藤文吉時代の実通便

- 主催：財団法人北方文化博物館
新潟大学人文学部
- 協力：清里フォトアートミュージアム
細江英公写真芸術研究所
- 後援：新潟県教育委員会/新潟市教育委員会
新潟日報社
読売新聞新潟支局
朝日新聞新潟総局
産経新聞新潟支局
毎日新聞新潟支局
月刊にいがた
NHK新潟放送局/BSN新潟放送
NST/TeNYテレビ新潟/UX新潟テレビ21
エフエムラジオ新潟
FM PORT 79.0
ラジオチャット・エフエム新津

にいがた

地域映像アーカイブ

—新潟大学人文学部GP授業の成果として—

教育改革プログラム

社会をひらく『きづく力』と『つなぐ力』—社会に見える実践的人文知の涵養と発信—

- 第二号 2011年11月2日発行
- 編集・発行 財団法人北方文化博物館
新潟大学人文学部
- 問合先 〒950-0205 新潟市江南区沢海2丁目15番25号
財団法人北方文化博物館
電話：025-385-2001 FAX：025-385-3929
URL：http://hoppou-bunka.com
- 印刷 有限会社 兄弟堂印刷所



新潟大學



北方文化博物館

NORTHERN CULTURE MUSEUM

